

俳句のしるし

「三十日(火) 雲後晴
志郎に年末の便りを書く。
庭を掃き、焚火、街に飾を賣
る。夜、事務御用納め。」
これは昭和三十四年の「雪解」
二月号に掲載された前年十二月の
発行所目録である。夕靄に沈む町
並や、匆忙の中にも惹きつけられ
ゆく年への思慕、感謝がそのす
みから溢れ出ている。

輪かざりのすいとんさみしき

「十二月」
皆吉 爽雨
安住 敦

が、垂れている数本の葉はほの
かな緑を帯び、香りをさへ宿して
清々しく、この葉は迎春の標を
手にとって、しげしげと見えて
いる。静かな温い目差しは輪かざりの
情から詠嘆へ、そしてそのうち
を捉えた表現となって完成され
た。深い韻脚が美しい調へとなっ
て句の内裏を二層高めているので
ある。
師は、観る、感ずる、表現す
る。この三つを正しく行い、書き
るに對象に迫り己れを写すと厳し
く教える。結晶体たる表現には如
手にとつて、しげしげと見えて
何なる別れも許してはならない
。この句にはそれらの調が麗め
られていようと思つた。

△例へばおでんの手に舌焼く
句の裏に透かしている。
この句は、はじめ「春燈」の四
三三二句で発表された。この句集
の苦さを痛めあつて、
「三三二句」の四年の章に取め
られた。この句の前に「春燈」で
給生活を棄て、俳句一筋の道を選
んだ。三月、八月もろり手が尊し
よつて、作者は四十七年に蛇笈賞
を受けた。(西山 誠)

年の瀬の作者の身近に、どんな
ことが起きたのか。作者は、それ
をたゞ些事といつておぼろげに
が、八脚にたたくしとてい
「よよ」といっているをみると
文字どりの些事ではないであら
う。ひとに對するかど一度は考え
ないでもなかつたが、春も押しつ
まつてなにもとまらぬ推しこむこ
ともあるまいと思ひ返し、ここ
は自分だけの胸におさめて済ませ
よう、と自分に言いかかっている。
そつと作者の心、処世態度が



か

長野・奈良井宿に

山口青邨顧問
十九番目の句碑
米寿を記念して



奈良井宿の青邨句碑

除幕式には夏草関係および地元
俳人、村当局者ら百数十名が参
加、記念句会も盛況に終つし師
教育委員会の協力を得て、建立さ
の米寿を讃えた。(鳥羽 ぼる)

秋の吟行会と 合同句集第四集刊行

富山県俳句連盟
流派を越え六百数十名を擁
する富山県俳句連盟は、秋晴れ
雨天競技場、美術館、射水神社、
の十月十四日、高岡古城公園で秋
の吟行会を催した。
高岡古城公園は城はないが、壁
と城の石垣が残り、大なる敷地に
多くの樹木が蘇をなし、運動場
式も多く、秋晴れの日曜日にはな
りの人出で賑わつてゐた。
正午締切で一四一名、二八二句
の出句があり、選句、披露、選
評、成績発表、表彰と、句会は順
調に行われ、午後三時半、和氣あ
いあいのうちに閉会した。
連盟結成の翌年から毎年刊行さ
れてきた年刊合同句集も第四集が
でき上り、吟行会当日、各人に渡
された。
今年はお出句者が少し減つて三五
四名、一人自選十五句、本名若
生年、月、住所、電話番号、職
業、所属社社を付記し、A五判
一八五ページ、価額二、〇〇〇
円。
立山には新雪がかがやき、平野
部に冬の訪れるのも近いようだ。
(富山 京良 卯一 報)

季節の志

枇杷の花
から果実はいうまでもなく木材
としても薬用としても重要視さ
れていくことが知られるが、主
に果樹として栽培されるように
なつたのは明治以後のことであ
る。
遠目には泰山木とまごころ大き
な長円形の葉は近づくとの緑
辺の不規則な鋸歯と葉脈の影を
帯びた影の深さで直ぐそれと判
別する。この葉は船車酔いの特効
がある。旅行の際そのままで
咀嚼していくので葉裏の柔毛を
磨り落とした二三枚を用意され
ると重宝である。
絵と文・赤堀 秋荷

經理部より
のおねがい
一、五十四年度協賛会費未納の
方は、大急ぎお払い込み
下さい。
二、会費、その他ご送金の
場合は、必ず正規の方法
でお送り下さい。特に現
金送金の場合はご注意下
さい。
三、ご送金のさいのお名前
は、協会名簿に記載され
ている姓を記載して下さい。
お知らせ下さい。
四、ご送金の内容(例えば、
協会費・カレンダー代金
自選代金...その他)を
わかりやすく添書して下
さい。
五、住所の変更、その他の
移動事項は振替用紙の裏
面などにお書きになられ
ます。事務の係りが違
いますので手続きが遅れ
ます。また、見落とし
場合もありますので、ご
面倒でも、必ずお書きで
お知らせ下さい。

動物園、その他の諸施設があり、
最近十数点の彫刻を配置した芸
術の森も作られ、池あり滝あり、
句碑、歌碑なども多く、さらに公
園のすぐ近くには露座の大仏もあ
つて、句材にはご欠かない。
公園わきの句会場、常念寺で十
時から受付、思い思いに公園の内
外を自由吟行する。折から美術館
では「院展八十年の流し」の美術
展が開かれており、神社での結婚
式も多く、秋晴れの日曜日にはな
りの人出で賑わつてゐた。
正午締切で一四一名、二八二句
の出句があり、選句、披露、選
評、成績発表、表彰と、句会は順
調に行われ、午後三時半、和氣あ
いあいのうちに閉会した。
連盟結成の翌年から毎年刊行さ
れてきた年刊合同句集も第四集が
でき上り、吟行会当日、各人に渡
された。
今年はお出句者が少し減つて三五
四名、一人自選十五句、本名若
生年、月、住所、電話番号、職
業、所属社社を付記し、A五判
一八五ページ、価額二、〇〇〇
円。
立山には新雪がかがやき、平野
部に冬の訪れるのも近いようだ。
(富山 京良 卯一 報)

短信
カナダ放送局が撮影
カナダ国立放送局が俳句につ
いて取材する「俳句の瞬間」の撮影
が、十月十九日、俳句文学館で行
なされた。
アンソロジー編集委員
アンソロジー編集委員会は九月
二十五日夜、俳句文学館で副館
原委員長以下各委員が出席、原稿
校正の分担を決定した。
なお「風花」からの編集委員は
大津水氏から佐藤隆一氏に交替
した。

大竹 孤悠氏逝去
評議員「かびれ」主宰大竹孤悠
氏は十一月十八日午後一時五十六
分、腦出血で逝去。八十三歳。
草間
火の色や
けふにはほまる十二月
日野 草城

編集室から
▽：月の古名という
か、別称いろいろか
と、か、昔の呼び方がある
。一月を睦月、二月が
如月、それぞれ一
月、二月である。そして、文月は
旧七月、葉月は旧八月、長月が旧
九月、神無月が旧十月、霜月が旧
十一月、旧十一月といふことは新
の十二月だ。このあたりから少し
混乱するのである。
霜月の次の節は旧十一月の別
称だが、とて、十一月も節で
ある。つまり、霜月も十一月
師走も十二月、といふことになる。
いささかおかしが、どうも
仕方がない。俳諧師も忙しく走り
回る年の暮といふことであらう。
▽：本年最終号、一年を振り返り返
つて至らぬといふのは何のをお
話するのだから。しかし、寄
稿家諸氏のご協力で何とか、思
ひの詰りな詩面となった。ここに原
礼申し上げる。

自註現代俳句シリーズ第一期全冊発売中
第一期(三十冊)五十音順
阿部みどり女集・相生垣瓜人集・阿波野青歌集・石塚友二集・上田五子石集・
大野林火集・岸風三樓集・岸田雅魚集・木村無城集・清崎敏郎集・香西照雄
集・後藤比奈夫集・篠田博二郎集・柴田白葉女集・鷹羽狩行集・富安風生集・
成瀬桜桃子集・野沢節子集・橋本鶴二集・原裕集・平畑静塔集・福田夢江集・
細見綾子集・水原秋桜子集・皆吉爽雨集・宮津昭彦集・森田時集・山口賢子
集・山口青邨集・百合山羽公集
新書版 一六〇ページ カバー付。一ページ二句組 二百句を収め一句ごと
に自註を附す。
一冊八五〇円(送料二〇〇円) 第一期三十冊一括申込 一万二千元(送料共)

野沢節子集より
昭和二十七年作
天地の息合ひて激し雪降らす
雪雲が垂れ込めてきてもなかなか雪は降らない。
或る一瞬天地の阿吽の息が合ったと見る間に激
しく白い雪が降り出した。天地は一つになった。

下村梅子集より
昭和四四年作
降る雪は天飛ぶ田鶴を消しにけり
雪が降々と降って来た。大空を飛んでいた田鶴の姿
はたちまち見えなくなった。昔の歌では鶴とは言
わず田鶴と言った。

小原善子集より
昭和四八年作
河豚の座や我れに禁酒の自戒あり
河豚はどうも魚はないと思ふ。冬ときの最高の
ものである。佳き酒は河豚にはつきもの、だが私
は禁酒を誓っている。

「俳句かるた」三部作(各句解説付)の頒布について
① 山口 蕪子集 俳句文学館編著 「動物俳句かるた」 一、二〇〇円
② 水原秋桜子集 俳句文学館編著 「俳句かるた」 一、六〇〇円
③ 山本 健吉集 俳句文学館編著 「俳句かるた」 五、八〇〇円
※対象はそれぞれ小学生中心の中学生中心の高校生以上を想定しています。幼児か
ら一般愛好者まで楽しめる句、佳句集です。
送料は実費とします。
申し込み先 〒160 東京都新宿区百人町三二一八
俳句文学館 俳人協会出版部
振替 東京 五五二七七